

地域おこし協力隊 第13回

北の果ての原野にあるユニークな魅力、 活用しなきゃもったいない!?



野口 裕康 (のぐち ひろやす)

名古屋市出身。慶應義塾大学理工学部卒業。2021年天塩町地域おこし協力隊に着任。自然環境を活用した観光と国際交流をテーマとして、新たな付加価値をもつ体験コンテンツの開発を目指している。総合旅行業務取扱管理者、応用情報技術者資格を保有。

「ついに北海道で暮らす夢がかなった！」天塩町地域おこし協力隊として着任することが決まった日、私の心の中にあったのは北の果ての地で暮らすことへの期待や不安ではなく、ようやくチャンスが巡ってきた、という感情でした。

【気が付けば北海道の大地に憧れていた】

私が生まれ育った愛知県名古屋市は、決して身近に豊かな自然が多く残っている都市ではありませんでした。それでも、里山や森に興味を持つようになったのは、幼いころから親の影響もありキャンプや登山の楽しさを体験していたからかもしれません。自然が好き、山が好き、森が好き。そんな自分にとって、雄大な自然景観のある北海道の大地はとても魅力的に感じられ、十代後半には漠然とではあるものの「北海道に住んでみたい」と思うようになっていました。



令和3年度「受け継ぎたい北海道の食」動画コンテスト優秀賞を受賞した作品「開拓汁」の撮影風景

【環境が変われば考えも変わる】

進学を機に新しい生活を始めることになった場所は北海道…ではなく、神奈川県横浜市でした。所属していた山岳会の遠征などで北海道を訪れることはあったものの、将来的に住むことの現実性は薄くなっていきました。しかし、この時期に経験した多様なバックグラウンドをもった人たちとの出会いは、その後の人生に大きな影響を与えることとなります。国内にしか興味がなく、海外の文化や外国人との交流に自身に関わることなんてありえない、と思っていた私の考えが変化したのも、この時期でした。ちょうど訪日外国人観光客が増加していたなか、ハイキングやキャンプを日本らしい場所で体験したい、という外国人観光客をボランティアで案内する機会が何度もあり、次第に「観光」「国際交流」といった分野に関わりたいたいと考えようになりました。

【そして北の果ての原野へ】

これまで知らなかった世界を一度じっくり見てみたいと思った私は、約2年間かけて、日本人観光客があまり訪れない地域を中心に43カ国を巡りました。様々な国で現地の住民が日本に対して抱いているイメージは、実際には全くの誤解としか言えないようなものもあれば、日本にいと考へもしなかったのに今言われてみれば納得できる内容も多くありました。日本の多くの地域で、受入体制や相互に文化的な理解が不十分なまま海外からの観光客を呼び込んだ結果、住民感情の悪化などの問題が生じるのも無理はない、と実感しました。帰国後は、不動産管理業の企業で業務の効率化に主に従事していましたが、心の内にはいつか日本の自然の素晴らしさを、観光を通して国内外の旅行者に体験してもらえるようなプロジェクトに携わりたいたい、という思いを抱いていました。

日本でも新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい始めると、瞬く間に国境は閉ざされ、国と地域が推し進めてきたインバウンド観光振興のあり方が見直され



地域の魅力を伝える方法を試行錯誤する過程で、町内キャンプ場内で撮影した写真をもとに作成したイラスト

る状況となりました。大人数の団体旅行客から、個人・少人数グループを対象としたエコツーリズムへと流れが変わりつつあるこの時期は、まさに自身が「観光」「国際交流」分野に挑戦すべきタイミングだと考え、まずは協力隊としてそのような任務ができる地域を探すことにしました。かつて強く希望していた「北海道で暮らす」ことも実現させたいと思っていたところ、天塩町の「地域資源を活用した体験型コンテンツ企画、インバウンド観光受入環境の整備」という業務内容が目に留まり、応募を決意しました。以前に一人旅で訪れたことがあったという点も、天塩町を選んだ理由の一つです。

【着任後の活動】

採用が決まり、10月1日付での着任となりました。天塩に到着してすぐに協力隊としての業務開始となったのですが、協力隊の募集を担当していた町職員の方が、天塩町について学びながら、また町民の方々とコミュニケーションをとりながら行える業務として、「受け継ぎたい北海道の食」動画コンテストの作品制作を提案してくださり、実際に畑で野菜を収穫することから始まり、ご自宅にお邪魔して調理するシーンまでの撮影を通して、交流だけでなく、歴史や文化について直接お話を伺うという貴重な体験もできました。

天塩町の秋は短く、あっという間に長い冬の季節となり、観光に関わる業務に携わることはありませんでしたが、町内の高校と関東の大学が連携して行うワークショップのサポートといった教育分野や、テレビ放送「ほっとニュース道北・オホーツク」への映像提供といった情報発信分野での活動が多くなりました。協力隊公式の各種SNSにも動画や写真、イラストを投稿しながら効果的な発信方法を試行錯誤しています。

新年度に入り雪どけが進んでからは、農村地区にある複式学級の小学校の授業に参加する機会も増え、また町内で行われる文化イベントとしては過去に例のない、人間国宝をお迎えして開催する「天塩國狂言」の公演に



制作した「天塩國狂言」公演ポスター。町内外に広く掲示された

実行委員として携わり、ポスターやチケット、公演プログラム冊子のデザインからオンラインでリアルタイム予約ができるサービスの開発まで、販売システムやデザインに関する業務全般を任せていただき、実践的な経験を得ることができました。

【当初の目標を実現するためには】

私が天塩町で協力隊として挑戦しようと決断したのは「大好きな北海道の地で、国内外の旅行客に美しい自然を体験できるコンテンツを提供したい」という目標があったからです。天塩町には、一貫性をもったコンセプトのもとに活用すれば、都市部や海外の個人旅行客を引き寄せるだけの自然環境や、日本海に面した高緯度地域の市街地という地理的条件がもたらすユニークな景観があると感じています。協力隊の任期は原則3年間と限られてはいますが、とらえ方によってはブルー・オーシャンなこの地域一帯で、時間はかかっても当初の目標を見失うことなく活動していきたいと思います。そのためにも、財政的に自立できるだけの利益を出していくことは不可欠となり、できる限り外部のサービスに頼らず、自分の力で行えることは自分で行う、という前提での事業計画が必要になると考えています。

【夢に向かって少しずつ進む】

まず小さい規模で計画をたて、それを実行に移し、その結果得られるデータから次の戦略を練る、というサイクルを繰り返しながら、最終的に目指すものへ近づいていくことが重要だと思います。そのなかで、同じベクトル上に目標を共有できる仲間を見つけられるかどうか、成功のカギとなりそうです。“Done is better than perfect.”という言葉がありますが、完璧を求めるよりもまず完成させよ、という意識を常に持ち、挑戦を続けていきたいと考えています。北海道の自然が好きで来たのだから、今後はもっと実際にフィールドに出て、そして何より楽しみながら活動しようという気持ちを大切にしていきたいと思います。



農村地区の小学校で、総合学習の初回授業で行ったプレゼンテーション